

# Eureka VI

六年制通信 No. 17 平成30年10月6日(土)号

## 幸運はどこに微笑むか

遠からず癌が薬で治る日が来る。本庶佑教授がそう言ったのは何年も前のことでした。私は薬の成分が直接癌細胞をやっつけるのだとばかり思っていました。今回のノーベル賞受賞で、いろいろ報道を読んでみると、全く違う発想の薬なので大変驚きました。癌細胞によって低下させられた免疫力を回復させるという発想は、癌の研究者にはちょっと考えつかないものらしいですね。素晴らしい業績に、晴れやかな賞が授与され、久しぶりに明るいニュースを聞いた気がします。

問題のPD-1というタンパク質の発見が1992年、オプジーボの開発が2014年ですから、20年以上の歳月をかけて誰もが考えつかなかった「治療薬」を作られたわけですが、教授は最初このタンパク質が何なのかわからなかった、ただ非常に大切なタンパク質であるという直観があったとおっしゃっています。しかも、PD-1の発見は偶然だったと言っておられます。女神がほほ笑んだ瞬間でしょうね。

よく歴史に残るような発見には「偶然」という言葉が使われますね。しかし、私はそういう話を聞くといつもパスツールの言葉を思い出すのです。彼は「偶然とは、準備のできていない者には微笑まない」と言っています。これは(パスツール自身はフランス語で言ったわけですが)英語では **Chance favors the prepared mind.** と言います。訳し方はいろいろありますね。「チャンスは備えある者に訪れる」でもいいでしょうし、「幸運の女神は準備している心に微笑む」でもいいでしょう。つまり、パスツールは偶然の発見は、実は偶然ではなく、発見に至る準備ができていたからに他ならない。そこを怠っている者には決して「偶然」は起こらない。そう言っているわけですね。もちろん本庶教授の場合もそうに違いないわけで、でなければ、偶然発見したタンパク質に、これを追求すべきだという直観が働くはずがないのですから。

このことは、私たちもよくよく知っておく必要があると思います。では準備とは具体的に何を指すのでしょうか。内容は人によって違うのですが、おそらく対象としている者への向き合い方のようなことではないかと、私は考えます。英語の **the prepared mind** は心的態度のことを言っていると思うからです。考えに考え抜く、没頭の継続というような態度、そういうものではないでしょうか。

そういえば、本居宣長は「考える」とは「むかう」ことだと言っています。かんがえる、の「か」には特に意味はない。「ん」は「む」つまり「身」、自分自身のこと。「がえる」は「かふ」つまり「交ふ」こと。要するに、対象となるものと自分自身が交わることだと言うのです。宣長さんは源氏物語を愛し抜いた人ですが、かの物語と自

分とが融合するくらいに没頭して読んだわけでしょう。考えるということは、それくらい激しいことだというのが宣長の解釈です。そういう心的態度には幸運の女神は微笑む、そんな気がしますね。

さて、本庶教授ですが、外交官か弁護士か、あるいは医師かと悩まれたそうですが、最も人を助けられるのは医学だと考えたのだそうです。よくぞ医学の道に進んでくれた、多くの癌患者が思っていることでしょう。どこかで読みましたが、これまで自分が大切にしてきたものに六つのCがある、とのことなので、皆さんにも紹介しましょう。Curiosity (好奇心)、Courage (勇気)、Challenge (挑戦)、Confidence (確信)、Concentration (集中)、Continuation (継続) がそれです。いかがですか。ウォルト・ディズニーの四つのCは有名ですが、この中に全部入っています。そこに本庶教授はChallenge と Concentration を加えて六つのCとし、それらを心に深く刻んでおられるわけですね。PD-1 の発見に至る過程もそうでしょうが、その後新薬の開発までにかかった日数を考えると、また当時日本では前例のない薬の開発に協力要請しても全ての製薬会社が断ってきたことなどを考えると、「確信」「勇気」「挑戦」「継続」といった、私たちが時々使う普通の言葉にも特別の重みが加わりますね。

私が感動するのは、ノーベル賞に輝くほどの学者でも、ご自分の研究を実践していくために必要なことを「好奇心」から「継続」まで、六つのCという言葉にしていることです。これらの言葉を指針として研究に勤しみながら、時には自分は今「挑戦」しているのか、「継続」は怠っていないかと反省されていたに違いない。言葉の力を考えさせられます。さて、君たちは生きていくうえでの、何か指針となるような言葉を持っていますか。若いうちにうんと勉強して、早く見つけるといいですね。

### 今週のおすすめ

・ホメロス 『イーリアス』 (松平千秋訳 岩波文庫)

トロイア戦争の最期を謳った叙事詩です。西洋文学、いや西洋文明の源流に当たると言ってもよい、古典ギリシアが誇る作品です。これまでに様々な先生方が翻訳を手掛けていますが、学問的にも文学的にもこの松平訳が最も信用できる、とされています。文庫の最後のところに、訳者が最も参考にした先訳として、土井晩翠を挙げています。それがうちの図書館にあるんですよ。原典は古典ギリシア語ですが、晩翠はこれを七五調の見事な日本語に訳しています。どうしてそんなことができるのか、不思議で仕方ないです。冒頭の数行を引用してみます。声に出して読んでみて下さい。

女神よ歌へ、アキリュウス ペーレーデース凄(すさま)まじく  
燃やせる曠患(しんに) —— その果てはアカイア軍に大いなる  
禍(わざわい) 来(き)たし、勇士らの猛(たけ)き魂冥王(めいおう)に  
投(とう)じ、彼らの屍(しかばね)を野犬野鳥の餌(え)と為(な)せし

こういう調子で1万行以上続きます。リズムがいいので音読に最適ですが、読んでそのまま意味が分かるには、かなり修行が要ります。皆さんには松平訳を推します。

BGMは宇多田ヒカルの *Can You Keep A Secret?* でした…。